

70万戸時代スタート地点に

エヌ・シー・エヌ田鎖社長が講演

二六会

セイホク（東京都、井上篤博社長）グループと流通業の合板担当者で構成する二六会（徳永浩久会長、丸紅建材）はさきごろ、都内で総会を開催した。議案は原案とおりの承認されたほか、新会長には河合邦浩氏（丸紅建材）の就任が決まった。

総会後の講演会で、田鎖郁男社長が「長期優良住宅と国産材の未来」と題して大不況時代突入と同社のSE構法の戦略を紹介した。

田鎖社長は、今後、新設住宅着工数はさらに減少し、70万戸時代をスタート地点にどう成長させるかが問われた。



笑いを交え会場を引き付けた田鎖社長

法を皮切りに、重要法制の流れや政権交代の影響、長持ちするための基準作りなどを解説した。

同社の長期優良住宅に対する考えでは、100年に一度の大地震に耐える構造及び交換可能な材料・システムが必要としたほか、住み続けられる自由度のある間仕切り、中古でも流通できる市場システム、陳腐化しない素材とデザインとの4点が重要とした。その結果、同社は全棟構造計算と性能保証、木造ラフメン構造による資産価値を伴う住宅づくりを打ち出している。

また、現在の消費減退は単なる不景気ではなく、「必要なもの以外買わない」という価値観が台頭していると、日本が消費面で進んだ国になったと位置づける。住宅業界も量から質へのパラダイムシフト（価値観の変化）が起こり、見てもよく機能が付いたものではなく、建物の価値で評価される時代になってくると続けた。

あるべきとする。加えて、長期優良住宅は1社では実現不可能で、200年後も使える材料で、200年後も倒産しない企業と取り組み、コンソーシアムで対応していくべきという考えを示した。

このなか、生き残りには、長期優良住宅対応商品と国産材活用ヒントがあると述べて、時代の追い風があっても単なる国産材利用ではなく、品質をしっかり明示し、それを保証し、産地が分かり、物づくりに物語があるべきとする。